

京大生の学習態度形成に関する調査へ向けて

山 本 英 司（経済学研究科博士後期課程学生）

はじめに

1987年に設置された大学審議会の諸答申を軸として、この間一連の大学改革が進められてきた。これに呼応して、京都大学においても、教養部改組・全学共通科目設置、大学院重点化、自己点検・評価の実施、総長特別補佐設置などの諸改革が行われてきた。

しかしながら、これまでの改革において、教育機関としての大学という側面においては最大の当事者とも言うべき学生の声が反映された形跡はあまり見られない。のみならず、そもそも学生の実態を踏まえた上で改革が行われてきたのか自体はなほ疑問でもある。あるいは、改革を進める側としてはかつて自身も学生であった経験から今さら実態など改めて調査する必要はないとの思い込みがあるのかも知れないが、周知のように今日のように大衆化した大学にあってはもはや学生はかつての学生（さらには大学に残った学生）と同様である保証はどこにもない。そもそも学生像の多様化が大学改革を迫っている一因ではないか。

学生の実態を踏まえるということは、同時にそもそも大学とは何かという問いに直面することでもある。教育機関としての大学という規定自体が問い直されるべきであろう。学生は大学に教育を期待してはおらず「大学卒業」資格を求めているだけであり企業もまた然りとは言い古された言葉である。逆に最近では大学教育に「社会に出て役に立つもの」を求める傾向があり一面では大学教育の復権とも思える事態が進行しているかのようである。しかしながら、それは「大学」教育ではないとの声も根強くある。一方、私立大学では資格取得や就職対策の講座を開いているところも多いが、卒業に必要な単位には算入されないという点で「大学」教育ではないことを自ら認めていることは興味深い。その他、履修形態の多様化や大学院進学率の上昇に伴う在学期間の延長なども、「大学とは何か」について論点を提供していると思われる。ともあれ、学生はいま「大学」に何を期待しているかについて、学生像の多様化を踏まえた上で改めて押さえておく必要がある。しかる後に、改革の具体的処方箋が検討されることになる。

以上の問題意識に基づいて、我々は学生の実態調査を志すこととなったが、諸般の事情により調査そのものは未だ実施に至っていない。そこで、調査予定項目の解説を行うことで中間報告に代えたい。

期待・失望・適応 ―「京大らしさ」のサイバネティクス―

調査項目の設定に先立って我々が検討を行った主な先行調査は、『卒業生から見た京都大学の教育』と『大学から職業へ』の2つである。これらはいずれも卒業生ないし卒業を間近に控えた者を対象に大学教育ないし大学がいかなる役割を果たしたかを尋ねたものである（両者を総合して以下「卒業生調査」と称することにする）。大学教育ないし大学の機能は「成果」によって図られるという観点からは卒業生調査は極めて有効に思える。事実、上記調査はいずれも興味深い結論を導き出している。

しかしながら、我々にとって不満に思えたのは、卒業生調査の射程範囲の狭さである。まず、「卒業生」という範疇に入らない者の存在が無視されている。彼らはどうして大学を卒業せずに通り過ぎていったのか、あるいはそこにこそ「大学とは何か」の答えが隠されているようにも思われる。また、『大学から職業へ』にあっては民間企業への就職が内定した者（さらに言うならば経済系の学生）のみに調査対象が限定されているが、民間企業以外に就職した者や就職が決まらなかった者はもちろんのこととして、昨今の大学院進学率上昇の傾向にあっては特に京都大学においては大学院進学者の動向が重要な要因となるべきである。

さらに根本的には、自身の過去について尋ねることに伴う問題がある。単なる記憶の薄れはもとより、人は、自己の過去の言動や過去に抱いていた意識内容を現在の自己のあり方から見て合理化する傾向がある。「自分は挫折したのだ」と思うよりは、「自分は願望を成就したのだ」と思いたがるものである。あるいは、極度に高い理想を過去に抱いていたとしてそこからの「挫折」に酔いしれる場合もあろう。

もちろん、調査の目的が異なるのであるから以上の問題点は上記調査の価値を否定するものではない。むしろ、我々

自身の問題意識を具体的なテーマへと結実させる触媒作用を果たしたことに於いて上記調査には感謝せねばならない。さて、我々がたどりついたテーマとは、いささか洒落めかして言うならば、“期待・失望・適応 ―「京大らしさ」のサイバネティクス―” というものである。

我々の調査は、現在について尋ねることを基本とし、同一母集団に対して調査を継続して行うことによって京都大学の果たす機能を明らかにしようとするものである。さらに進んで、あえて過去を尋ねることによって、過去の調査と突き合わせていく中で、「いかに過去が合理化されたか」を明らかにすることもできるであろう。

入学当初どのような期待を抱いていたか、それが学生生活を送る中でどのように実現されあるいは裏切られたか、そしてどのように期待が修正されたか、どのような実生活を送るようになったか、そして大学を通り過ぎた後いかに大学生活を総括するか。その総体が京都大学の果たす機能なのであり、これを特定年度における入学者を継続して追っていく中で、「京大らしさ」を明らかにしようとするのが我々の調査の目的である。

具体的には、まず予備調査を実施して調査項目等の妥当性について検討した後、翌年度の入学生について、入学手続時（大学の実態をほとんど知らない状態における純粋な期待ないし誤解）、全学共通科目履修登録時（大学生活に一通り慣れ、最初の適応と期待修正が行われる）、前期試験時、後期試験時、2回生以降は原則として年1回、そして最短修業年限経過以降は数年おきに調査を継続するというかなり野心的な計画が立てられた。しかしながら、既に述べたように諸般の事情により予備調査にすら至っていないのが現状である。

調査項目の具体的内容について

数度の共同討議を経て予備調査用に作成されたアンケート用紙（案）を資料1と資料2に掲げる。資料1は全数調査、資料2は抽出調査を想定して作成されたものである。以下、調査項目設定にあたっての我々のねらいについて解説する。

まず、資料1について。

A群は調査対象者の属性について尋ねたものである。京都大学は比較的転学部が自由であるが、この再適応の試みはなぜ起こるのか、どのような帰結をもたらすのかに注目するものである。

B群は所属大学・学部への適応について尋ねたものである。

C群は進路について尋ねたものである。「4年で卒業して就職」というかつては典型と見なされたであろう以外の大学通過形態に注目するものである。

D群は「京大らしさ」について尋ねたものである。読書調査にあたって、実際には読んでいないにもかかわらず「読まなければならないと思っている本」、「読もうとして挫折した本」がイメージとしての「京大らしさ」を浮き彫りにするのではないかと仮説に立っている。

E群は学習活動について尋ねたものである。学生は授業に何を期待しているか、どのように取り組もうとしているのか、そもそも授業が学生生活においてどのような位置付けにあるのかを明らかにしていきたい。

F群は課外活動について尋ねたものである。E群とあいまって、学生生活の全体像に迫れればと思っている。

G1は調査の改善のための設問であるが、あるいは調査の実施そのものに対する貴重な意見が寄せられるかも知れない。

次に、資料2について。これは資料1のE・F群に相当する内容をコマ単位で詳細に調査しようというものである。

一口に授業と言っても科目によって大いに異なるであろう。典型的には、かつての一般教養（あるいは違うとご批判を受けるかも知れないが現在の全学共通科目）と専門、また一般教養内部でも一般教育科目（現在の全学共通科目A・B群）と外国語科目（現在の全学共通科目C群）と保健体育科目（現在の全学共通科目D群）、さらには文系にとっての理系科目（現在の全学共通科目B群）と理系にとっての文系科目（現在の全学共通科目A群）といった違いが考えられる。

また、授業はいわゆる授業時間のみにおいて完結するものではない。大学設置基準においては45時間の学修をもって1単位として、講義及び演習については3分の1から3分の2まで、実験・実習及び実技については3分の1以内を自習に委ねることとされているが、実態がいかなるものであるかは興味深いことであろう。

まとめに代えて

以上の調査は継続して行うものであって、当然のことながら対象入学年度の学生は繰り返し同様の設問に答えることになる。また、随時中間報告も行われる予定である。したがって、調査対象者が調査活動や調査結果によって歪められてしまうおそれがある。このことは、本調査の問題点であると言えよう。しかしながら、以下は共同討議を経ない私見であるが、この「歪み」こそが大学改革の一つの推進力として活かされるべきである。そのことを述べてまとめに代えたい。

1995年度の教育白書において、大学改革が特集されている。そこに以下の記述がある。大学教育に対する「多様な要請に対応していくためには、各大学は、それぞれの理念・目的を明確にし、個性化、多様化を進めることが重要である。どのような学生を受け入れ、どのような教養教育、専門教育を行うのか、どのような能力を身に付けて卒業させるのか、各大学において、検討を深めていくことが求められる。その結果、大学が、それぞれの特色に応じ、幾つものタイプに分かれていくことも予想される」(114頁)。いわゆる大学の個性化である。

この趣旨はもっともとしても、個性化をどのように進めていくのが問題である。同白書においては、「まず、各大学等において、それぞれの大学等の理念・目的についての議論を深め、これを明確にすることが求められる」(120-121頁)とあるが、教養部廃止や大学院重点化に見られるごとく、各大学がいっせいに同じ方向を向いて「改革」を行おうとして必ずしも個性化につながっていない現状が見られる。そうかと言って、文部省が既存の大学に対してA大学は何、B大学は何と個性を指定することは文部省自身が言うところの「各大学の主体的な改革」にも反することになる。

やはり文部省の言うように「各大学等において、それぞれの大学等の理念・目的についての議論を深め、これを明確にすることが求められる」のであるが、その際、あたかも白紙に設計図を書くとするのは無謀であるし、あるいは教員集団の利害のみに基づいて学生不在のまま改革が進められることもあってはならない。やはり、伝統なり学風なりに基礎を置くことが必要であろう。京都大学の場合、1994年度の自己点検・評価報告書の題名に『自由の学風を検証する』とあるが、「自由の学風」は多くの大学が謳っていることでもあり、何がどう「自由」なのか改めて問い直されるべきであろう。そのための自己点検・評価なのであるがその主体には学生も含まれるべきである。学風の多くの部分が学生によって体现されていることは言うまでもない。

進路指導において「自分自身を見つめなさい」とよく言われる。これは、既に客観的にあるところの「自分」を何かしら超越的な視点から把握せよというのではなく、「自分自身を見つめる」という作用を通じて「自分」を形成していきなさいということであろう。もちろんそこで形成される「自分」は全く任意のものであるわけではなく、これまでの「自分」やそれをとりまく環境に規定されている。同様のことが組織にも言えるのではないだろうか。

この意味で、調査結果からのフィードバックを伴った継続調査は、京都大学が自分自身を認識する過程のみならず形成していく過程でもであろう。調査結果を改革に活かす以前に、調査活動それ自体が改革の過程そのものでもであろう。

全学的なバックアップを得ての調査のすみやかな実施を願うものである。

参考文献

- ・竹内洋（編）『卒業生からみた京都大学の教育 — 教育・職業・文化 —』（高等教育研究叢書 34）広島大学大学教育研究センター、1995年3月31日。
- ・刈谷剛彦（編）『大学から職業へ — 大学生の就職活動と格差形成に関する調査研究 —』（高等教育研究叢書 31）広島大学大学教育研究センター、1995年3月20日。
- ・文部省『我が国の文教施策（平成7年度）』大蔵省印刷局、1996年2月16日。
- ・京都大学自己点検・評価委員会『自由の学風を検証する——京都大学自己点検・評価報告書——』京都大学、1994年6月。

資料 1

京都大学学生調査 アンケート

本調査は、京都大学における教育環境のあり方を考えていくための材料として、「大学」を学生の視点からとらえ直して見ることを目的としています。調査結果が他の目的のために使用されたり、個人のプライバシーがおかされることは決してありませんから、安心してご回答ください。

《ご記入上の注意》

特に指示のないかぎりは、最も当てはまる項目番号にひとつだけ○をつけてください。

京都大学高等教育教授システム開発センター

まず、あなたのことについて、いくつかお答えください。

A 1 性別 男・女

A 2 所属学部〔転学部をした方は以前の学部もお答えください〕

() 学部

転学部前：() 学部

A 3 入学年次(19) 年

A 4 住居形態

1. 自宅 2. 本学学寮 3. 下宿・アパート・マンション・その他

B 1 入学前の第1志望をお答えください。

1. 現在の所属学部 2. 本学の他の学部 3. 他大学

B 2 転学部の希望はありますか。ある場合、希望する転学部先もお答えください。

1. ある() 学部 2. ない 3. 考慮中・その他

B 3 入学試験を受け直すもしくは他大学編入の希望はありますか。ある場合、志望校およびもしあれば志望学部等もお答えください。

1. ある() 大学 () 学部・類・学群

2. ない 3. 考慮中・その他

B 4 本学に進学した動機についてうかがいます。以下の項目より3つまで選び、1位から3位までの順位を記入してください。該当する項目がない場合、9を選んで具体的に記入してください。

1位() 2位() 3位()

1. 家族・高校の先生・友人などからの勧めで 2. 社会的評価が高いから

3. スタッフ、設備が優れているから 4. 将来の就職を考えて

5. 難関を突破したかったから 6. 私大に比べて授業料が安いから

7. 大学の伝統や雰囲気にあこがれて 8. 実家から近いから

9. その他()

C 1 あなたが卒業する時期について、現在の予定をお答えください。

1. 最短修業年限以前で中退して大学院に進学したい

2. 最短修業年限で卒業する

- E 3 あなたはほとんど出席しない授業は何を目安に決めていますか。 ひとつだけお選びください。
1. 興味が持てない
 2. 自分で勉強する
 3. 試験前だけ勉強すればよい
 4. 出席をとらない
 5. その他 ()
- E 4 あなたはゼミなど参加型の授業にはどのような態度で臨みますか。 ひとつだけお選びください。
1. 積極的に発言するつもり
 2. 指名されたら発言するつもり
 3. できれば指名されたくない
 4. その他 ()
- E 5 あなたはゼミなどで発表担当者になったら、準備には主に何を利用しますか。 いくつでもお選びください。
1. 教科書などの指定文献
 2. その他の関連文献
 3. 特に何も利用しない
 4. その他 ()
- E 6 あなたは自分のレジュメやレポートに満足していますか。 ひとつだけお選びください。
1. 満足している
 2. 満足していないが満足のいくものを作りたい
 3. 満足していないがそれでよい
- E 7 あなたが満足のいくレジュメやレポートを作る際に誰の協力が必要だと思いますか。 いくつでもお選びください。
1. 友だち
 2. 先輩（院生を含む）
 3. 若手教官（助手、ティーチングアシスタント）
 4. 指導教官（教授、助教授）
 5. 協力は必要ない
 6. その他 ()
- E 8 あなたが受けた試験や作成したレポートについて、事後指導を受けたことがありますか。
1. ある
 2. ない
- E 9 あなたは試験やレポートについて事後指導が必要だと思いますか。また、その理由もお書きください。
1. 思う
 2. 思わない
- 理由 ()
- E 10 あなたは授業が休講のとき、どこで・誰と・何をして過ごしますか。
- どこで ()
- 誰と ()
- 何をして ()
- E 11 あなたは下宿（家）で暇なとき何をして過ごしますか。
- ()
- E 12 あなたは試験勉強では主に何を利用しますか。 いくつでもお選びください。
1. 自分の講義ノート
 2. 他人の講義ノート
 3. 教科書などの指定文献
 4. その他の関連文献
 5. 特に何も利用しない
 6. その他 ()
- E 13 あなたは主に何を利用するために図書館（図書室）に来ますか。 ひとつだけお選びください。
1. 勉強机
 2. 文献
 3. 検索システム
 4. 新聞雑誌
 5. 語学学習機能
 6. ソファ
 7. その他 ()
- E 14 あなたは普段熱心に取り組んでいる勉強がありますか（学期末試験の勉強は除く）。 ひとつだけお選びください。
1. ある
 2. ないが、何か取り組みたいと思っている
 3. 特に取り組みたいものはない
- E 15 E 14で1または2と答えた方にうかがいます。それはどんな勉強ですか。
1. 自分の専攻の勉強
 2. 専攻とは直接関係のない勉強 ()
- F 1 あなたはサークル・クラブ等に所属していますか。
1. はい
 2. いいえ
 3. 考慮中・その他

F 2 F 1で1と答えた方にうかがいます。それはどのような団体ですか。

()

F 3 あなたが普段関心をもっている問題があれば、いくつでも挙げてください。

()

G 1 今回のアンケートについて、お気付きの点がありましたらご指摘ください。

()

《ご協力ありがとうございました。》

資料 2

《授業履修》

あなたの平均的な 1 週間の生活についてうかがいます。以下の表のマス目に記入してください。なお、記入は次のようにしてください。

• 授業科目名

登録している授業科目名を記入してください。二重登録等の場合は主に出席している授業科目名を記入してください。

• 種別

以下より選択してください。

- A. 全学共通科目 A 群 B. 全学共通科目 B 群 C. 全学共通科目 C 群
D. 全学共通科目 D 群 学. 所属学部 of 学部科目 他. 所属学部以外の学部科目

• 単位数

単位数を記入してください。ただし、半期開講の場合は 2 倍の値を、2 コマ連続の授業の場合は 1 コマあたりの値を、それぞれのマス目に記入してください。

• 出席状況

この 4 週間について出席回数を 0 から 4 の数字で記入してください。

• 予復習時間

1 コマの授業のための予習・復習・レポート作成等にあてる平均的な時間について、以下より選択してください。

2 コマ連続の授業の場合は 2 分の 1 をそれぞれのマス目に記入してください。

0. ほとんど 0 1. 1 時間未満 2. 1 時間以上 2 時間未満 3. 2 時間以上 3 時間未満
4. 3 時間以上

• 受講理由

その授業を登録した理由を以下より選択してください。

1. 他に選択の余地がないため 2. 授業内容に興味があるため 3. 単位が取りやすいため
4. 資格を取るのに必要な単位のため 5. その他

• 授業評価

授業内容への満足度について、以下より選択してください。

1. 大いに満足である 2. どちらかと言えば満足である 3. 可もなく不可もない
4. どちらかと言えば不満である 5. 大いに不満である

• 授業外活動

その時間帯に授業に出ていない場合もしくは休講であった場合のあなたのもっともありそうな行動を以下より選択してください。

1. 他の授業に出る 2. 図書館等で勉強 3. パソコン・ワークステーション端末に向かう
4. サークル活動等 5. 生協書籍部・書店 6. 買い物 7. 食事 8. アルバイト
9. 自分の部屋に帰る 10. その他

		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
1 限 目	授業科目名						
	種別						
	単位数						
	出席状況						
	予復習時間						
	受講理由						
	授業評価						
	授業外活動						
2 限 目	授業科目名						
	種別						
	単位数						
	出席状況						
	予復習時間						
	受講理由						
	授業評価						
	授業外活動						
3 限 目	授業科目名						
	種別						
	単位数						
	出席状況						
	予復習時間						
	受講理由						
	授業評価						
	授業外活動						
4 限 目	授業科目名						
	種別						
	単位数						
	出席状況						
	予復習時間						
	受講理由						
	授業評価						
	授業外活動						
5 限 目	授業科目名						
	種別						
	単位数						
	出席状況						
	予復習時間						
	受講理由						
	授業評価						
	授業外活動						